

今日の説教のポイント <使徒言行録 18 章 1～11 節>

①パウロは信仰の友に癒された！

コリントに来たパウロはアキラとプリスキラと一緒に暮らしました。何気ない報告のように思えますが、実は、パウロがコリントに来た時はひどい鬱状態にありました（Ⅰコリント 2:3）。そんな時に、ローマで既に信仰者となって迫害されてもなお信仰に生きていたアキラとプリスキラと一緒に生活できたことは、パウロにとって何よりの慰めとなったことでしょう。ボンヘッファーは名著『共に生きる生活』の中で、「自分の心の中のキリストは、兄弟の言葉におけるキリストよりも弱いのである」と語り、神様は信仰者を通して私たちに現れられることを述べています。「一緒にテント造りをした」、この何気ない営みを共にした時間の中にも、神様の癒しの業がこの夫婦の姿や言葉を通して込められていたことでしょう。私たちはどうでしょうか？ そんな友を持っているかではなく、そんな友となっているかを考えたいと思います。

②啓示体験を持つてもいい。しかし、もっと大事な十字架の事実！

パウロはよく幻の中で神様の啓示を受けました（9. 16:9も）。神秘的な啓示体験を持つ、これをうらやましく思う人は多いでしょう。しかし、パウロ自身は、「自分も啓示体験を持つが、それを誇らない」と言っています（Ⅱコリント 12:1以下）。なぜでしょうか？「誇るなら、自分がした啓示体験でなく、主を誇れ」、これがパウロの口癖でした（Ⅰコリ 1:31、Ⅱコリ 10:17）。（自分の中の）体験ではなく、（自分の外での）あの十字架の事実、神様が御子イエスを十字架に架けられたという事実、キリスト教信仰にとって大事なのはこれです！

③「神様と私」だけでなく、「神の民（教会）」を加えた信仰を！

「恐れるな。私があなたと共にいる」。聖書全体を通して語りかけられる神様からの中心メッセージです（ヨシュア 1:9、エレミヤ 1:8、マタイ 28:20）。同時に、こう言われる時、常に神様は「わたしの民」（10）の中にいる「あなた」を考えておられます。神様がこのような「民」を設けて下さり、私もそれに加わるから、神様の守りを確信しているのです！ 教会の肢となることの大事な理由がここにあります！